



一夢を奏^{かな}で続け^てー
 どんぐりピアー

夢を奏かなで続けて

「どんぐりピアノ」

須賀小学校では毎年秋に、「校内音楽会」が開かれます。この時期になると、どの教室からも子どもたちの演奏や歌声が美しく響き、保護者や地域の方々もこの音楽会をとて楽しんでしています。実は、この「音楽会」が開かれるには大きなわけがありました。それを伝えてくれているのが、「どんぐりピアノ」と呼ばれているピアノです。この「どんぐりピアノ」は、今でも大切に資料室に保管されています。黒い光沢もとれたこの「どんぐりピアノ」には、次のようなお話がありました。

昭和二十四年、まだ戦争の傷跡きずあとの残る日本は衣食住も不足するほど貧しく、ピアノをはじめ、今使っているような多くの種類の楽器はどの学校にもありませんでした。そんな中でも、学校には子どもたちの明るく元気な歌声がいつも教室から聞こえました。大変な時代でしたが、先生方はピアノの伴奏で歌うことで、もっと音楽の楽しさを伝えたいと思いました。しかし、ピアノは当時のお金で十五万円もしました。大人が一月働いても一万円にもならない時代でしたから、ピアノを買うことはそんな簡単なことではありません。それに、家でも子どもの手を借りたくらいの生活で、ピアノどころではなかったのです。

「ピアノって、どんな音がするのかな。」

「私たちの歌とピアノの音が合わさるとどうなるのだろう。」

「ピアノのある学校になって、すばらしい音楽会を開きたいなあ。」

「本当に、ピアノが学校にくるのかな。」

「ピアノがほしいなあ。」

絵本をながめながら、当時五百十二名の子どもたちの夢はふくらんでいきました。

「ぼくは、どんぐりを集めるよ。」

「わたしたちは、学校にヒマワリを植えて種を売ろう」

「秋にはイナゴ取りができるよ。ぼく得意なんだ。」

子どもたちは、この夢の実現のために動き始めました。春には、ヒマワリの種を一人五粒ずつ校庭にまきました。ヒマワリの種からは油がとれます。みんなヒマワリが元気に育つよう、暑い中汗まみれになりながらいっしょにけんめい水をやりました。この種を売って得たお金は三千七百六十五円でした。目標の金額からするとわずかですが、子どもたちにとってはピアノに手が届いたかのような気持ちでした。すぐに郵便局に貯金しました。貯金通帳の名前のらんには「ピアノ様」と書きました。

秋には、学校が終わると手作りの布を持って田んぼへ出かけ、イナゴをつかまえました。夕焼けにそめられたいなほの間を、右往左往する子どもたちのすがたが見えかくれました。イナゴからは、なんと九千五百五十円もの収入がありました。その後は、どんぐりの実、お茶の実と集めました。日が暮れて暗い中でも、どんぐりを夢中でかき集め家の電灯の下で拾い分ける人もいました。このような子どもたち姿を見て、農家の仕事のいそがしい中でも、袋いっぱいにどんぐりをいれて届けてくれる家もたくさんありました。こ





うして、「ピアノ様」の貯金通帳は、子どもたちの思いと先生、家庭や地域の方々をつなぐ大事な通帳になっていきました。頭をよせ合って次々に通帳をのぞき込む子どもたちの姿が毎日見られました。それでも、通帳は目標額の三分の一にもなりませんでした。

「ぼくたちで本当にピアノが買えるのかな。」
「わたしたち、いつになったらピアノで歌が歌えるのかしら。」

このような不安の声も少し出始めましたが、「もっとがんばって、みんなの夢をみんなでかなえようよ。」

「みんなでピアノを買うんだ。」
子どもたちは、さらにどんぐり、つばきの実を集め続けました。

この子どもたちの熱心な活動は、村長さんをはじめ村中の人たちに伝わっていきました。そして、足りない分はPTAと村が出してくれることになりました。昭和二十五年二月、須賀小学校は他の

どの学校よりも早くピアノを購入することができたのです。
ピアノが届いた日、黒い大きな箱の中に真っ白な鍵盤がいくつも並ぶピアノを見て、子どもたちからは歓声があがりました。音楽の先生のひく「ポン、ポン。」と、弾んだ美しいピアノの音色に学校中が喜びと感動に包まれました。こうした子どもたちの取組は、

「僕らの汗の結晶・カシの実やイナゴ取り・・・」という見出しで当時の新聞にも紹介されました。

学校では、さっそくピアノに合わせて一年生から順番に練習を始めました。そして、村の人たちをおまねきして、「ピアノありがとう」の感謝音楽会を開きました。ピアノの音色と子どもたちの歌声は、村の人々の心にも美しくひびきわたりました。それからいつしか、このピアノは「どんぐりピアノ」と呼ばれるようになり、みんなの思いにこたえるように須賀小学校の音楽を長い間支えてきました。子どもたちや先生、村中の人たちの夢をのせ演奏し続けてきた「どんぐりピアノ」。

今、「どんぐりピアノ」は自分の役割を終えて静かにすわっているかのようにですが、これからも須賀小学校に伝わる子どもたちの熱意や須賀小学校によせる地域の人々の思いをつなぎ、ずっと、ずっと、美しく奏で見守ってくれているようです。

須賀小学校では、今年もまた、家族や地域の方がたくさん集まって音楽会が開かれます。



須賀小校風の源「どんぐりピアノ」

須賀小学校校長 吉羽 秀男

ここに、本校の「どんぐりピアノ」が、町教育委員会のご尽力により道徳の郷土資料として、教材化できましたことは、誠に喜びにたえません。当時の子ども達五十二名が、「ピアノで歌をうたいたい」という、強い願いを持ち、何とか「ピアノを買おう」と熱心に取り組んだお話です。買うと言っても、大変高価なピアノです。しかし、子ども達の熱意は、村当局やPTAにも伝わり、夢にまで見たピアノを購入することができました。それがいつしか「どんぐりピアノ」と呼ばれるようになりました。このように、須賀小の子ども達が全力で取り組む姿は、良き伝統となりました。後々、再びどんぐりを拾い集め、それを上野動物園に送ったところ、お礼として入園券が送られてきました。そして、これを近隣の養護施設へ寄付したという善行が新聞に掲載されました。その他にも自分たちのお小遣いを節約して学用品を岩手県の間部小学校に寄託した新聞記事も残されています。

このようにどんぐりの実は、子ども達の心の中で芽を出し、しっかりと根付き、確実に成長して、現在まで良き校風として脈々と受け継がれています。私たちは、このお話を長く伝え、新たな校風づくりに寄与することを期待しています。

学校の宝「どんぐりピアノ」

「どんぐりピアノ」に寄せて

元岩槻市立和土小学校校長 岩上 孔昭

須賀小学校に「どんぐりピアノ」があることは耳にしていまいましたが、具体的なことはわかりませんでした。ところが、平成二十二年四月、校内から「須賀小学校のピアノ購入に関する経緯を伝える数種類の新聞・貯金通帳・子どもの作文」が見つかり、左記の事項が明らかになりました。それは、当時の社会状況のもと、昭和二十四年、ピアノに寄せる夢を実現するために全校の子どもたちで活動したこと

- ・活動の内容は、ひまわりの栽培・イナゴ採り・かしのみ拾い等であったこと
- ・活動で得たお金は「ピアノ様」と記名した通帳で貯金したこと
- ・活動で得た金額は目標額の三分の一にも届かなかったこと
- ・不足分は、村の人たちが支援してくれたこと
- ・子どもたちが村の人たちを招待して感謝の音楽会を開いたこと
- ・このような経緯を持つピアノは「どんぐりピアノ」と呼ばれ、須賀小学校の音楽教育推進の基となり、子ども

もたちに、明日への希望・生きる勇氣・将来への夢を与え続けるとともに学校と子どもたち・学校と家庭・地域の強い絆となりました。どんぐりピアノ以来続いている「校内音楽会」には、毎年多くの家庭や地域の方が訪れています。子どもたちが夢を実現するために懸命に活動してから六十年余の間、学校は児童数の増加・学校教育の発展に伴い、校舎も木造平屋建てから近代建築へと新築・改装が行われてきました。

しかし、いかなる状況下にあっても、どんぐりピアノは保存されていきました。

今日資料室に大切に保存されている、黒い光沢の輝きを失ったどんぐりピアノを目にするという感動でいっぱいになります。

昭和二十四年、まだ、国民全体が生活に懸命なときに、夢を実現するために須賀小学校で行われた活動「どんぐりピアノ」のお話―が町内児童の道徳性の陶冶に資することを願って止みません。

「どんぐりピアノ」道徳資料刊行に当たって

宮代町町長 庄司 博光

この度、道徳における宮代町郷土資料として「どんぐりピアノ」が作成されましたことは私の喜びとするところであり、関係の皆様方のご尽力に対し、心より敬意を表します。

この話は戦後間もない宮代町誕生前の須賀村時代の須賀小学校で実際にあった話という事を知り、大きな感動を覚えました。当時、ピアノの存在すら知らなかった子どもたちがピアノの伴奏で歌うことを夢み、八カ月にわたり全校児童でどんぐりやイナゴなどを集めて自分たちの手でピアノを買おうとしたのです。その努力が実り、村役場やPTAの方々を動かし、その結果、近隣の町村のどこにもない高価なピアノを購入することができたのです。私はいかに子ども達がたゆみない努力を続けたのか、その素晴らしい姿に心を打たれました。その校風は今も脈々と伝わっていることを念じます。

そして、これからも友だちと共に大きな目標に向かって力を合わせて夢の実現を果たしてほしいと願ってやみません。

宮代町教育委員会教育長 桐川 弘子

道徳資料として、郷土の偉人「鳥村盛助」に次ぐ第二弾として、ここに「どんぐりピアノ」が刊行される運びとなりました。

今は使われていない「どんぐりピアノ」と称するピアノの存在は知っていましたが、吉羽校長や地域の岩上氏の調査から「どんぐりピアノ」の謂れが明らかとなりました。当時の新聞記事と一緒に「ピアノ様」と書かれた一通の預金通帳が発見され、当時の子どもたちの姿が浮き彫りになったのです。

この話と同じ年代に育った私にとって、それはまさに衝撃的なことでした。高嶺の花であったピアノを自分たちの手で買おうとした決意、その後の子どもたちの粘り強い行動力に圧倒されました。さらに、見守り応援してくれた教師や父母の存在、八カ月後、ついに村や地域を動かしたその力は、何と素晴らしいことでしょうか。私は、すぐさま、「道徳の資料」として後世に残す使命感を感じました。そして、本資料を通し、子どもたちの心に新たな灯がともり、友と共に目標に向けて全力を傾けることの素晴らしさを、実践を通して感得してほしいと心から願っています。

この本を作るのに、ご指導ご協力をいただいた方々(敬称略)

宮代町文化財保護委員 岩上 孔昭
元岩槻市立和土小学校校長
埼玉県道徳教育研究会顧問 山西 実
前春日部市立春日部中学校校長 大塚 健嗣
久喜市立鷲宮小学校校長

この本を作成した人

宮 代 町 長 庄司 博光
宮代町教育委員会教育長 桐川 弘子
宮代町立須賀小学校校長 吉羽 秀男
宮代町教育委員会教育推進課長 篠原 敏雄
宮代町教育委員会学校教育室長 蛭間 吉伸
宮代町教育委員会主幹兼指導主事 白石 薫
宮代町教育委員会指導主事 鈴木 修平

表題

宮代町教育委員会教育長 桐川 弘子

挿絵

宮代町立須賀中学校教頭 千浦 茂子



—夢を奏^{かな}で続けて—

どんぐりピアノ

編集・発行／宮代町教育委員会
